

ワイルド研究会報告

酒井 敏 編

(日本ワイルド協会顧問)

第5回ワイルド研究会報告

日 時：1996年9月28日（土）午後2時より6時まで

場 所：北沢ギャラリー（北沢書店2階）ホールA

〒101 千代田区神田神保町2-5 TEL. 03-3263-0065 FAX: 03-3263-0064

会 費：約500円（コーヒーまたは紅茶等の代金）

司会：大 曲 陽 子

内 容：

1. 挨拶……………川崎 淳之助
2. 「ワイルドのイメージーション—『漁夫とその魂』を読む—」…堀内 正子
3. 「イエイツから見たワイルド」……………溝呂木 邦江
4. 「『秘密のないスフィンクス』のレディ・アルロイ
——ラファエル前派風の女性の残像として——」……………加藤 千晶
——ここで一寸肩の力を抜いて、お茶をのみながら自由に話し合しましょう。——
5. “Lady Windermere's Fan”の映画（BBC制作）観賞
〔解説〕……………酒井 敏
6. 総まとめ……………荒井 良雄

当日は晴天に恵まれたこともあって、階下の北沢書店を訪れたかたが集まった会員諸氏が25名になり、英国風景画に囲まれた「文化サロン風」の雰囲気の中、間で大曲さんの用意されたショートブレッドを賞味しつつ、楽しい歓談の一時を持つことが出来ました。

はじめに

川崎 淳之助

大曲陽子さんの司会で、第5回ワイルド研究会が開かれましたが、私は3人の発表者の中、最初のお二人、堀内正子さんと溝呂木邦江さんのプロフィール紹介という役目で発言させて頂いたわけです。

ワイルド研究会を作ろうと、最初に構想を打ち出されたのは、前会長の荒井良雄氏でした。その目標は、夏期セミナーや全国大会とは別に、若手・中堅の研究者に日頃の研究成

果をふまえて、野心的な発表をして欲しいということにありました。その趣旨には全く賛同いたしました。同じく賛同された酒井敏氏が世話人の役をお引き受けになり、第1回から今日まで、ずっとその役を続けて来られました。毎回、大変なご苦労を重ねて来られたこと、心から感謝いたしたいと思います。今回、3人の方が発表されましたが、何れもユニークな視点からの刺激的な発表で、研究会は大成功だったと思います。

堀内さんは、「漁夫とその魂」を修辞学的な視点から論じたもので、ユニークな発表だったと思います。溝呂木さんは、イエイツの心霊学的な面から見たワイルドという、参会者の虚を突いた視点からの発表で、われわれに、たくさん問題を投げかけました。加藤さんの「秘密のないスフィンクス」は“表面と象徴”に的を絞った発表でワイルドの芸術論の核心に迫る興味深いものでした。

『ウィンダム夫人の扇』の上映は、十分に楽しい企画だったと思います。

ワイルドのイメージーション（要旨）

——『漁夫とその魂』を読む——

堀内 正子

ワイルドの童話〔5編は『幸福の王子とその他の物語』（1888）、4編は『石榴の家』（1891）に所収〕について批評家達はアンデルセンの影響を指摘している。特に「漁夫とその魂」はアンデルセンの『人魚姫』と同じテーマを扱っているが、多くの点で全く異なった作品に仕上がっている。『人魚姫』では、末の姫が15歳の誕生日に嵐の海で助けた王子に恋をする。王子の愛と永遠の魂を希求して‘声’を代償に魔女から足を貰い側に仕えるのだが真実を語る舌はなく、王子が隣国の王女を妃に迎えては溶けて泡になる定め。しかし清い愛と善行故に今は空気の精に変えられた人魚姫には、300年後の永遠の魂が約束される。「漁夫とその魂」では、状況も展開も結末も正反対になっている。若い漁師は人魚姫と愛し合うため喜んで魂を捨てる。人魚が登場するのは初めだけで、大半は漁夫とその魂の葛藤からなり、叙述の現代英語に対し会話には古い言葉が使用され聖書の響きがある。キー・フレーズは同じものが或いは極一部が変化した形で3度繰り返され、主要な出来事も3度ごと（3という数字はマジックナンバーである）に帰結する。3の連鎖は海に始まり陸における魂が代表する人間の世界・怒りの神が治める欺瞞の世界を駆け抜け、最後に漁師と人魚の愛の成就・愛の神の勝利に向けて渦を巻く。「見ることも・触ることも・知ることもできない」世界をワイルドのイメージーションはダイナミックに構築する。

イエイツから見たワイルド（要旨）

溝呂木 邦江

『幻想録』（A Vision, 1937）は、螺旋運動を行う2つの向き合った円錐と月の諸相を

表わす円を用いて、人間の精神活動、存在、歴史を体系化しようとしたものである。一方、オカルティズムの仮面を着けた、イエイツ自身の人間観察の記録としてとらえても興味深い。月の諸相は、28相に分割され、新月は第1相、満月は第15相に相当する。人間の精神は、新月に近づく程、客観的・非個人的、逆に満月に近づく程、主観的・個性的性質を帯びる。その中でワイルドはパイロンとともに19相に位置づけられている。初対面の時から、ワイルドの豊かな卓越した表現力と語りの上手さにイエイツは敬服していた。しかし、その特異な天分が、19世紀末の時代性の中で幸福であったかは別問題だったのである。イエイツは、この相の人間は「統一性」を求めないために、「断片的」生を送ると語る。ワイルドの優れた知性は、活かされる環境にある時には、恒久的な価値を持つ作品を創造できるのである。ワイルドにとって「存在の統一」はまやかしてしかない。いわば、連続する時間の中で、彼の信念から生み出された瞬時の閃く美に生きるのだ。自己の美意識にあくまで誠実であったが、それ故に、断片的ともいえる瞬時に自己を充足させる美学を貫くことになった「悲劇的世代」の一人だったと言えるだろう。

『秘密のないスフィンクス』のレディアルロイ（要旨）

——ラファエル前派風の女性の残像として——

加藤 千晶

『秘密のないスフィンクス』（1891）は、軽い娯楽的な読み物と見られがちで、あまり高い評価を得ていないが、ワイルドの芸術観を探る上で貴重な手がかりとなる作品である。謎めいた未亡人レディ・アルロイに、D. G. ロセッティらラファエル前派の芸術家達が崇拜した神秘的な美女の残像を見ることにより考察をすすめる。

謎に魅せられた青年ジェラルドに真実を追求された後の、アルロイの唐突で現実感の薄い死や、謎はすべて虚偽であったらしいという、拍子抜けする結末には、生々しい現実より表面（仮面）の美にこそ神秘は存在し、この美を守ることが重要であるというワイルドの姿勢が窺える。一方、ほんやりした大きな瞳や豊かな髪、細身長身といったアルロイの特徴を全て備えていたラファエル前派の美女達は、ロセッティのソネットにおいて、肉体の美と内面の神秘の両側面において讃えられている。ロセッティにとって女性の姿は、その奥にある神秘を隠しつつも現す半透明の覆いであった。『嘘の衰退』で芸術は現実との間に壁を築くと述べられているように、アルロイの美しい仮面は越えがたい壁として描かれ、現実的なジェラルドにその奥を覗くことを決して許さない。この作品でワイルドは、ラファエル前派風の謎めいた美女を、効果的な仮面という道具として用い、仮面としての芸術の美を楽しむ余裕の大切さを、少し意地悪な形で我々にほめかしているのだ。

“Lady Windermere’s Fan” の映画について

酒井 敏

この映画は協会の元会長の井村君江先生が、かつて滞英中にBBCで放映されたテレビ・ドラマをビデオに収録して持ち帰られたもので、原作を忠実に（台詞も殆どそのまま）映像化した大変貴重な作品です。1925年制作のE・ルビッチ監督の無声映画とは違って、舞台上の俳優の表情をアップで捉え、しかも動きの少ない場面の中で登場人物の心理を克明に描写しています。と同時に、抑えた色調によって伝統的な風習喜劇の雰囲気を出したコスチューム・プレイという印象も受けます。日本では台詞の面白さ（警句）が中々出しにくいせいか、舞台の上演が中々見られないのが残念です。



あとがき

—定着したサロン風研究会—

荒井良雄

酒井先生が世話役を買って出て下さったお蔭で、春秋二回のワイルド研究会は、回を重ねるごとに充実してきた。私が世話役を引き受けた第1回の駒沢大学における会や、河内恵子先生が世話役をなさった慶応義塾大学の教室での研究会とは全く雰囲気の違う、私学会館や北沢ギャラリーでのサロン風の研究会は、親密で和やかな文化の薫り高いサロン風の格調があって、世話役の酒井先生のお人柄とご趣味の成せる技と、いつも感服している。

今回は3人の発表者も司会者も女性の会員で、内容も研究法も異なる3人3様の発表は、ワイルド文学の多様性そのものの例証であった。BBCのテレビ・ドラマ『ウィンダミア夫人の扇』を、久しぶりに大きなスクリーンで再見できたのも嬉しかった。文学研究もマルチメディア時代に入った今、21世紀のワイルド研究に備えて、この研究会のさらなる活性化を期待したい。

追記：次回の研究会は来年〔1997年〕3月29日（土）の午後、今年度と同じ神田の北沢ギャラリーで開催する予定です。内容は未だ固まっていますが、自薦・他薦を問わず発表のお申し出（協会事務局、又は酒井まで）をお待ちしています。（酒井敏記）